

Historian's View

NO. 30

□天災とボランティア、その心

- 「彼なら、さもありなん」
- ボートを曳いて現れた
- 「わしのために泣いてくれるんか」
- YMCAでなければ出来ないこと

2011年3月17日 東日本区1998～2011 ヒストリアン 吉田 明弘

大地震、大津波、原発危機に被災された方々、悲しみと苦しみと不安にある方々に心からお見舞いを申し上げます。

* * *

『日本ワイズメン運動 70 年史』(1997 年)は、ワイズメンズクラブの前史から、1997 年の東・西日本区分割までを網羅すべく、通史の執筆を 1994 年初めから始めました。

作業は、不明な点の問い合わせ、文献調査など根気のいる課題を残しながらも、全体の流れの記述は順調に進みました。途中、ぴたっと筆が止まったのは、68 年目、1995 年 1 月に起きていた阪神・淡路大震災にさしかかったところでした。資料は山ほどありましたが、まだ過去の出来事として書く気には、どうしてもなれなかったのです。

そんなときに、目を通したのが、1959 年 9 月 26 日に起きた伊勢湾台風の救援活動の報告資料でした。偶然なことに、その 5 年前、1954 年の同じ日、9 月 26 日に青函連絡船・洞爺丸遭難事故が起こっていました。

彼なら、さもありなん

洞爺丸遭難事故では、台風 15 号によって函館港を出港した青函連絡船が転覆し、1,698 人の犠牲者がでました。海難事故史上、タイタニック号沈没に次ぐ惨事でした。犠牲者の中に北米 YMCA から 1948 年に日本に派遣されていた H・ディーン・リーパー (H. Dean Leeper) 協力主事

がいました。学生 YMCA を担当して働き、「ぼくたち日本人は」と無意識に言うほど、日本に溶け込み、彼ほど学生に信頼され、慕われた主事はいないと言われていました。

後になって、沈みゆく船の中で、いったんは身に付けた救命胴衣を外して、傍らの人に譲った外国人がいたことが話題になりました。この話を作家三浦綾子は、『氷点』『続氷点』の中で描いています。そのモデルがディーン・リーパーであったとも言われています。学生時代に彼を知る徳久俊彦さん(東京 YMCA 学院理事長)は、日本 YMCA 同盟出版の『思い出のディーン・リーパー』で「彼なら、さもありなん」と記しています。リーパー家には、ミッジ夫人と幼い 4 人の子どもが残されました。5 年後、米国で伊勢湾台風のニュースを知った夫人は、子どもたちに日本で大きな台風があり、わが家と同じようにお父さんを亡くした子どもがたくさん出たことを話し、働ける子には車みがきのアルバイトをさせ、小さい子どもには小遣いの中から献金させたと書かれています。

東京西クラブの竹内隆さんは、北大の学生 YMCA 汝羊寮の寮生時代に、リーパーの指導を受けました。その時、かたわらでベビーフードを食べていたのが、現広島平和記念館館長のスティーブン・リーパー (Steven Leeper) さんです。竹内さんは、2010 年 8 月、ある対談企画で、リーパーさんと再会した際、このことについて質問しました。「わが家では当たり前のこと。よく絶食し

て献金をすることがあった」と答えたそうです。誰かに何かをするなら、余ったものを差し出すのではなく、痛みも感じよう、という親の教えだったのでしょか。今のワイズでいえば TOF です。

キャンプ場のボートを水没地に

1959年9月26日に伊勢湾沿岸を襲い、北陸に抜けた伊勢湾台風は、名古屋气象台観測史上最高の、市内で風速 45.7m を記録しました。風に煽られた海水が満潮と合致し、しかも前日からの大雨による河川の増水が重なり、河川、海岸の堤防が決壊して、多くの地域を水没させ、5,101 人の犠牲者を出しました。名古屋 YMCA をはじめ、関西の YMCA は救援隊を組織して、悪臭の泥水に浸かりながら救出、復旧に働きました。このとき、YMCA の各キャンプ場からボートを運びこみました。学生や YMCA 会員の活躍、ワイズメンの協力がありました。当時、ワークキャンプは行われていましたが、ボランティアという言葉が一般的でなく、“勤労奉仕”と言われていました。この働きに対して、名古屋 YMCA、名古屋ワイズメンズクラブは、名古屋市から表彰状を受けています。

自動車運転教習所まで開設

1923年9月1日に起きた関東大震災では、東京 YMCA 神田会館は焼け落ち、横浜 YMCA 会館も躯体を残して全焼しました。関東大震災というと東京のことばかり取り上げられることが多いのですが、震源地が相模湾北西部だったこともあり、横浜市内の家屋建造物はすべて倒壊し、炎につつまれたと言われています。

東京・横浜両 YMCA は地震発生と同時に罹災者救護を始め、9月5日には、神戸 YMCA の賀川豊彦の助力もあって、共同で総合的な救護本部を立ち上げ、組織的な救援に取り組みました。その活動は広範囲にわたりました。神戸・淡路大震災の際の西宮 YMCA（組織上は神戸 YMCA）の現場責任者だった主事山口元さんは、『西宮

YMCA 救援活動はらたち日記』（1995年）に、「関東大震災の YMCA 救援活動記録を見ていると、われわれがやったことは、すべて 72 年前に行われていた。唯一、新しいことと言えば、インターネットによる情報活動だけだと思う」と書いています。

東京市が交通網整備のために、急遽、バスを 500 台を購入した際、バス運転者養成の自動車学校まで、東京 YMCA が開設しています。

阪神・淡路大震災

阪神・淡路大震災のことは、どなたもご記憶のとおりです。その時のワイズメンの思い、働きについては、『日本ワイズメン運動 70 年史』（前記）p411～416 にも記述していますので、お読みいただきたいと思います。ホームステイの学生を二階に休ませ、自分は階下に寝たため犠牲になったワイズメンもおられました。夫、子息、母堂を失った方もありました。

岡本尚男区理事（京都キャピタル）は、「これまで、われわれワイズメンがクラブ活動をとおして奉仕の心を養ってきたのは、この日のためではなかったのか」と、全国のワイズメンに 3 年間の復興献金を訴えました。

ボランティアの受け入れ

あの時の YMCA、とりわけ、自らも深手を負いながらも救援活動を指揮した神戸 YMCA の活躍は、目を見張るものがありました。緊急避難所として被災者の受け入れ、炊き出し、ボランティア受け入れと養成、治療・診療、情報収集・発信、心のケアプログラム、高齢者・障がい者援助、生活ボランティア、救援物資の配布など。その働きは「神戸に YMCA あり」、と強い印象を与えました。もちろん、地元はもとより全国のワイズメンもこれを支えました。

何かの役に立ちたいという、止むにやまれない思いで、全国から神戸に集まった若いボランティアたちは、働き場が分からず、泊まる場所も食料

も得られない「ボランティア難民」といわれる状況となりました。その時、YMCA は、彼らを受け入れ組織化して、被災者の御用聞き活動を展開しました。スキー教室に用いる番号の入ったゼッケンを胸につけて訪問しました。これには、売名行為との批判もありましたが、名刺がわりでもあり、責任ある行動となりました。西宮 YMCA だけで延 2 万人のボランティアを受け入れました。

「わしのために泣いてくれるんか」

次の話は、神戸 YMCA 名誉主事の今井鎮雄さんが、後に東京クラブの例会で話された内容です。聞き覚えですから、少し違うかもしれません。

救援物資のリンゴが届いて、ボランティアが、手分けして、半壊状態の家に配って回りました。

ある女子学生が、独りのお年寄りを訪問しました。「おじいちゃん、リンゴやでえ」。しかし、手を出そうとはしませんでした。

「わしは、もうええんや」

「おじいちゃん、リンゴ食べて元気出しいや」しかし、首を振るばかり。やがて口を開きました。「おかあちゃんも、死んでしもうたしな、子どもたちも死んでしもうた。わしは、もういいんや」女子学生は途方にくれてしまいました。こんなことを言われるとは思っていませんでした。それまでは、どこに行っても、感謝され、逆に励まされていきましたから。リンゴを差し出したまま、途方に暮れました。おじいちゃんの悲しみは分かりますから、立ち去ることもできません。何も言えないで思わず涙をこぼしてしまいました。

驚いたのは、おじいちゃんでした。「あんた、何で泣いてるんや」。「だって、おじいちゃん悲しいこと言うんだもん」。おじいちゃんは、しばらく黙っていました。「あんた、わしのために泣いてくれてるんか」女子学生は頷きました。おじいちゃんは、またしばらく黙っていました。そして言いました。

「わし、元気出すわ」

数日後、崩壊した建物を整理する地域の人たち

の中に、おじいちゃんの姿があったそうです。

女子学生は、おじいちゃんが、本当にして欲しかったものが何かを学んだようです。

このような時にも、若者にチャンスを与え、成長を導くのが YMCA です。そこにさきやかでも支援しようとしているのが、ワイズメンズクラブなのです。

もともと、前記の山口元・主事によると、マスコミの取材で必ず聞かれたのが、「YMCA さんは、いつからボランティア活動を始めましたか」ということで、いつも「150 年前からです」と答えていたそうです。

YMCA でなければ出来ないこと

ワイズメンズクラブが大切にしている奉仕の「心」を表現するとき、あるいは、『ワイズの信条』の中の「自分を愛するように隣人を愛そう」を説明するとき、聖書の「善いサマリア人のたとえ」が引かれることがあります。

これは、イエスと律法学者の対話ですが、そのなかで、イエスが質問に対して、たとえ話で答えた部分です。あらまし、次のような話です。

ある人が、道行きの途中、追いはぎに襲われました。賊は、服を剥ぎ、半殺しにして立ち去りました。そこに通りかかったのは、祭司でした。その人を見ると道の向こう側を通って行ってしまいました。次に来たのは、レビ人でした。彼もその人を見ると同じように向こう側を通って行ってしまいました。最後に来たのは旅人のサマリア人でした。彼は、哀れに思って、傷に油とブドウ酒を注ぎ、包帯をして、自分のロバに乗せ、宿屋に連れていき、介抱しました。翌朝、宿屋の主人にお金を渡し、介護を頼み、もし余分に費用がかかったら、帰途に支払うことを約束するのです。

このたとえを話した後、イエスは、律法学者に「この三人のうちで、だれが賊に襲われた人の隣人になったと思うか」と聞き、律法学者は、「その人を助けた人です」と答えました。これに対して、イエスは「あなたも同じようにしなさい」と

言ったのです。

当時の社会では、祭司もレビ人も神に仕えるものであり、律法に忠実でありました。一方、サマリア人は、疎外されたよそ者で、祭司、レビ人とは敵対関係にあったそうです。そして当時の律法では、死体に触れることは汚らわしく禁じられていたそうです。

西宮 YMCA で、救援活動の間、法律、縦割り、前例とたえず衝突を繰り返した前記、山口元・主事の解釈は、こうです。

「死体と思われるものから規則どおりに離れ歩くことは、社会的には全く常識的な行動であった。サマリア人は、律法やきまりを気にせず、(愛で) 近寄った。なんとも不真面目な非常識な行為であった。西宮 YMCA が、(救援活動中に) 山賊とか、非常識軍団と呼ばれるたびに、私は、善きサマリア人になったような最高の喜びを感じていた」。

山口さんによれば、

「サマリア人は、応急手当をするための油、ぶどう酒、包帯、さらにロバを持っていた。ボランティアには、物資と道具とそれを用いるスキルが必要だ」「サマリア人は、資金も持っていた。ボランティア団体も資金が必要だ。義捐金は集まっても、ボランティアの活動資金は、なかなか集まらない。費用がかかったら、帰りまでにそれを稼いでこようという自信と手腕を持ちたい」。

「イエスが、『行って、あなたも同じようにしなさい』と言ったように、まず考えるのではなく、すぐその人の隣まで行かなくてはならない。そして、内臓が震えた(原語の意味)とき、いてもたってもいられなくなったときに手をさしのべる。「走りながら考えること」こそ、行政には決して出来ない、YMCA でなければ出来ないことだと思う」。

奉仕の対象の選択・トリバンドラムの場合

ワイズでも、突然、目の前で起こった事態に対応する奉仕もあれば、もう少し判断に時間的に余

裕のある奉仕や継続的な活動があります。後者の場合、その奉仕対象を選ぶことは、やさしいようで、意外に難しく、決断がつかないものです。

富士山部が、部として 25 年間続けてきた、インド・トリバンドラム YMCA の裁縫教室に対する支援プログラムも、一例かもしれません。これは現地 YMCA に協力して裁縫教室を立ち上げ、近年は卒業生にミシンを贈っています。しかし、25 年も続くと、当然ながら部内でもいろいろな声が出てくるようです。経済成長の著しいインドにいつまでも贈ることがよいのだろうか、本当に役に立っているのかなど。

今年度の現地のミシン贈呈式に同行した井上暉英さん(富士)のメネット和恵さんが、ブリテンに書いた報告『ボランティアのボランティア』の一部に、奉仕についての面白い記述がありました。もとより、富士山部の奉仕事業の対象は、富士山部のメンバーが、決めることであり、私ごとやかく言うことではありません。ここではその物の見方をご紹介します。以下は抜粋です。

「何故、トリバンドラムなの？」

援助する所が、インドでなくても、他にもたくさんあるのではないかと、そんな声があるとすれば、

「どこなら間違いはないの？」

と逆に聞きたい。ベストワンを選び出すことは、それ程に難しいことなのだ。これは結婚と一緒だ。

「この人なら間違いはない」

「誰よりも愛している」

その普遍性は約束されているだろうか。した結婚に意味があり、それが縁であり、それを守り続けることが大事なことはないだろうか。

「健やかなる時も、病める時も、富める時も、貧しき時も」ではないのか・・・。

25 年間、インドのこの地へミシンを送ってきた富士山部のワイズメンは、力強く、心優しく、格好良い存在ではあるまいか。

小さな、時には的はずれに見えるボランティアかもしれない。しかし、少なくとも、ワイズメンの接したインド人達は、日本に親日感情もつてく

れるだろう。

あとがき

1995年1月17日、阪神・淡路大震災が起きた朝、状況を把握しないで家を出て、会社のテレビに映し出された現地の凄さに驚きました。しばらくすると電話が入りました。あるボランティア団体でした。被災地に救援物資を送りたいので、商品ももらいたいとのことでした。聞くと10人ほどのグループで、送り先も届ける方法も決まっていますませんでした。救援物資は業界団体を通じて送るので、ということで納得してもらいましたが、その対応の早さに感心しました。その後も同様な依頼がありました。今、それらの団体はどうなっているのでしょうか。

あの時、それまで良い活動をしていたボランティア団体が、次々に活動を停止せざるを得なくなりました。義捐金や救援物資を集めても、それを現地に届ける費用などでクラブ会計が疲弊して立ちゆかなくなってしまうのだそうです。鹿鳴館時代の上流階級の夫人たちが始めた“慈善”の伝統をひく日本では、ボランティア活動は、手弁当が当たり前とされています。小さな活動ならともかく、スケールが大きく、長期にわたるものになると音をあげてしまうのです。

ボランティア団体が「善きサマリア人」ならんとするには、油やぶどう酒だけでなく、ロバも金も必要なのです。または、持てるものを持ち寄って共働しなくてはなりません。

その点、YMCAは、災害時の支援の専門団体ではありませんが、常駐のスタッフがおおり、施設があります。訓練されたリーダーも、コーディネート能力も、ネットワークもあります。スタッフにはこれまでの有事において、現場や後方支援を経験した者も多くいます。それでも、そのための資金を持っているわけではありません。活動資金がどうしても必要なのです。

西宮YMCAが悪戦苦闘していた時に、ある新聞社の厚生事業団の親しい人が立ち寄って、これ

から県庁に2億円を届ける、YMCAで欲しいものはないかと、言うので、小型トラックを頼みました。数日すると、紙面に「小型トラック求むYMCA」と載ったので、「あの野郎」とスタッフ連中で笑ったそうです。それでもトラック5台が提供され、大活躍したそうです。しかし、ガソリン代はYMCAが負担することになりました。

ワイズメンは、自発的な奉仕の心を学び、その仲間を増やすとともに、単独で直接、救援活動を行うことも、善意の個人や小さな団体を繋げるコーディネーターになることもできるYMCAの活動を資金的に支えることが望まれています。

YMCAもワイズメンズクラブも、これまで国内外の事故・災害に対して、その時々、精一杯の救援活動を行ってきました。今回の東日本大震災は、これまでの災害とは、まったく状況が異なっているようです。いろいろな面で、日本の国民生活全体に影響を与えることになるでしょう。しかしそのことは、ここではふれません。

神戸YMCAは、太平洋戦争の敗戦2カ月前の1945年6月、会館を空襲で焼失しました。『日本ワイズメン運動70年史』(前記)執筆を始めた時、本城敬三総主事は、毎朝、西宮市の岡田山にのぼり、<神戸の町にYMCAが必要です。神よ、今一度、神戸の町にYMCAを再建させたまえ>と、祈った、という記録を見つけました。神戸YMCAは、1946年に再建に立ち上がりました。阪神・淡路大震災における救援活動の報告・記録を読んで、<神戸の町にYMCAが必要です>の言葉がよみがえりました。50年後の神戸にYMCAが必要だったのだと思いました。

敗戦直後、全国に9だった都市YMCAが、今は、34となっています。戦後、ゼロから出直したワイズメンズクラブは、今は155クラブになっています。この国難とも言うべき時期に、日本の国に、YMCAとワイズメンズクラブがあって、本当によかったと思いたいと願っています。